

「今、私の晴雨計は！(55)」

「カナダ旅行と年末雑感！」

平山 征夫

前回に続いての愛唱歌の話は年明けに延ばすことにした。というのはアズナブールの死をカナダ旅行の最後、モントリオール空港で知ったと書いたところ、「いつものように旅行記は書かないの？」と聞かれたからだ。実は書こうと思ったのだが、書くだけの中味が無かったので書かずにした。最大の要因は、自然は雄大ながら何分歴史が浅く(日本の明治維新以降とほぼ同じ)文明的に深いものがなかったからだ。

ラの街に着いてびっくりした。まるでラスベガスのミニ版のようなのだ。長年揉めていたカジノ解禁が実現した途端、派手なネオンが街を席巻したのだ。ナイアガラは滝も赤や青にライトアップされていた。思わず解禁後の日本の街のことを想像してしまった。メープル街道とロンシャン高原の紅葉、ケベック市のセントローレンス河を見下ろす城のようなホテル、モントリオールまでの列車から見た沿線の紅葉の眺めなどは特筆しておくが、出だしのナイアガラで愕然とした旅は、最後のモントリオールでもあまり見るものがなく、教会がメインではヨーロッパで良いわけだし、挙句に期待していた現代美術館が閉

館という追い打ちで愕然とした。そんな中、ケベック郊外のオルレアン島は良かった。セントローレンス川の真ん中に浮かび、ノンビリした田園風景の中に、リング園や教会が続くとても絵になる風景の島だ。丁度小学生がリング園に遠足で来ていて真っ赤に紅葉した木の下での野外教室風景は、私にシャッターチャンスを提供してくれた。ケベック市で宿泊したホテル「シャトー・フロンテナック」は街のシンボルとなっている歴史的建造物で雰囲気抜群だ。一八九三年開業のこのホテルはその後も建て増しされ次第にシャトー風になっていったが、セントローレンス河を見下ろすその

にはチャールズ英国首相とルーズベルト米国大統領が大戦の闘い方の打ち合わせを行った「ケベック会談」で賓客の宿泊場所となったことでも知られたホテルだ。このホテルの画廊で二人のカナダ画家の絵を知ったのと、ホテルの前のアートの並んだ横丁で、女性画家と絵の話が出来たのも良い思い出だ。この女性画家は日本の琳派の影響を受けたのか、シンプルな構図で装飾的な色の美しい画を書いていて、この横丁の30人くらいの画家の絵の中では一番気に入った。前に立って眺めていたら話しかけられ暫く絵の話をした。すぐ近くで年配のおじさんがジャズにびったりの服装と表情で、アコーディオンを弾き

ながらシャンソンを歌っていた。日本より紅葉が丁度ひと月早い。だから冬は寒いのだろうと想像しながら、落ち葉を踏みしめ街を後にした。

「書く気にならない」と言いながら結構書いたが、もう一つそれこそまさに拾遺話がある。カナダと言えばメーブルシロップ、それが採れる「サトウカエデ」は国旗のデザインになっているが、赤く染まったその落葉を拾って読みかけの本に挟んで持ち帰った。すると新潟で紅葉が始まった途端、落ち葉が気にかかり、通勤や散歩の合間に拾い集めた。今その落ち葉が沢山私の机の周りで押し葉になっっている。それまで気が付かなかったが、樹によって葉の形、大

きさ、紅葉の仕方など千差万別だし、葉脈はまるで毛細血管のようで神秘的だ。天狗の団扇のような大きな葉はブラタナスの葉だ。一番多いのがイチヨウと樺だが、イチヨウは樹によって黄葉の時期にかなり差が出る。樺はほゞ一斉だが落ち葉はぎざぎざの輪郭と葉脈が幾何学的で面白い。でも、やはり持ち帰ったサトウカエデの落ち葉が真つ赤で一番美しい。



実はカナダ旅行で一番印象に残ったのは、旅行中の10月初めに行われた「ケベック州議会選挙」だ。ケベック独立運動という大きな政治課題でずっと揉めてきた土地柄、州議会選挙は市民にとって大事件だ。結果は、永年第一党の「ケベック自由党」が、移民受け入れ抑制などナシヨナリスト的政策を掲げた新興政党C A Q（ケベック未来連合）に敗れた。独立を掲げる「ケベック党」は第三党に落ちてしまった。既成政党は、永年の独立議論に疲れた市民に飽きられたようだ。カナダのトルドー首相のおひぎ元でカナダ第二のケベック州でカナダ自由党が敗北し、トランプ米大統領に近い政策を掲げた新興政党が勝利

したことは、NAFTA（北米自由貿易協定）の見直しなど保護貿易による自国主義を迫るトランプ大統領に、毅然と反論してきたトルドー首相の今後にどう影響するのか、今後要注視と思っってきた。帰国後、始まった「外国人労働者の受け入れ」議論が、あまりにも国内企業の要望などの反映でしかなく、人道論に基づくカナダのトルドー首相の議論を見てきた者としては「移民問題に触れない日本は国際的には二流国だ」と叫んでしまった。そのトルドー・カナダ首相は、若くて恰好も良く中々人気が高いが、移民受け入れ発言などで昨年末初めて支持率が50%を切って話題となったが、支持率が高いことで

は我が国の安倍総理に負けない。先程触れたトランプ対応以外でも基本的な政策で安倍総理とは異なっている。はっきり言ってトルドー首相の支持率の高さは、それまでの保守主義への反動や若さへの期待など理解できるが、安倍総理のそれにはずっと疑問符がついてきた。「野党がだらしないから」とか「自民党内にも代りがない」「消去法で彼しかない」などの解説が多い。中には「景気はまあまあだし、これまでの総理に比べ外交では頑張っている」と前向きの評価をする人もいる。国際連合の常任理事国入りを悲願に、外遊しお金をばら撒いて票集めをする姿は、「一带一路」の中国とあまり差はないと思っ

しまうのだが……。今年の年末は不愉快な思いを抱いたまま越年だ。重要案件を議会議論も殆どせず強行採決したこともあるが、「防衛大綱見直し」を議論もせず空母化を予算に盛り込み、消費税の引き上げを控えながら、一〇〇兆円という大台超え予算を組み、二〇二〇年度の財政再建をさらに先延ばし(二〇一一年度から何年度か)をし、国民があまり知らない赤字国債の60年償還と実質日銀引き受けの上に胡坐をかいて、孫や子に借金のツケを回し続けているのには怒りすら覚える。こう書いてはっと思つた。歳のせいか最近「やたら怒りっぽく、僻みっぽく」なっていることだ。先

日ある会で80代後半の人が挨拶で「今日は若い皆さんからエネルギーを頂き返りました」と挨拶するのを聞いて、おもわず「吸い取られた方はどうなるのだろう」と思ってしまった。「防衛大綱」もそうだ。集団的自衛権に次いで、軍事力強化が目的(そうとしか見えない)の総理は、仮想敵国の北朝鮮、中国の脅威増大(本当にそうか?)には内心感謝しているのではないかと思ってしまう。仮想敵国と位置付けられる国の人々の気持ちは「忖度」したのだろうか。それなら防衛大綱と同時に「どうやって平和を増進するかをまとめた平和大綱」を発表すべきではと思うのは歳のせいだろうか。

先日の天皇陛下の誕生日での声明にはジーンときた。大戦の責任を背負いながら象徴として過ごされた「旅」を、共に歩んでこられた美智子皇后さまに対するねぎらいと共に、今後の平和への懸念をにじませながら話された(ように聞こえた)。明らかに天皇陛下の平和への希求の考え方と総理のそれとは異なっている。象徴としての存在の限界の中で、どう行動すべきか迷いながら来られたのだろうと推察しながら聴いていた。年が明けると間もなく「平成」が終わる。その評価は後年されるだろう。バブルと停滞、そして格差拡大の経済、アニメ・漫画・スマホなど文化の軽量化、合間無く押

し寄せる災害に麻痺してゆく助け合う心、など議論されるだろう。私には知事時代韓国の議長をされたK氏が言われた「日本の政治家で太平さん以降良い顔をした政治家はいませんね」という言葉がずっと気になったままだ。

(平成30年12月28日)

